

第3回

高齢者及び障害者のための保健福祉サービスに関する システム科学国際会議

3rd International Conference on Systems Science in Health-Social Services
for the Elderly and the Disabled

安 梅 勅 江

1. はじめに

高齢者及び障害者のための保健福祉サービスに関するシステム科学国際会議 (International Conference on Systems Science in Health-Social Services for the Elderly and the Disabled) は略称「SYSTED」と呼ばれ、今回、第3回を迎える。

第1回は1983年、カナダのモントリオールで、第2回は1987年オーストラリアのパーズで開催された。今回、初めてヨーロッパにおいて、ヨーロッパ最古の大学の発祥地、イタリアのボローニャにて1990年4月17日～20日の間、ボローニャ地域を含むエミリア・ロマーナ地区社会保障局の主催により開催された。

ボローニャ市は、その昔、学生や教員を多数受け入れるために、アーケードの上部にも家屋を延ばした独特なたたずまいを残す。街全体が煉瓦色に溶け込み、かつての貴族が残した尖塔が街のいたるところでその威厳を競い、あたかも中世がそのまま息づいている大学街である。

ボローニャ市郊外にある国際会議場は、大学街の名にふさわしく、年間を通じて数多くの国

際学会が開催される。国際学会のためのエリアとして、学会参加費納入のための銀行、歓談をしながら学会参加者が一度に食事のできる巨大なレストラン、駅やホテルからのシャトルバス等が機能的に設置されていた。

今回の SYSTED90 には、ヨーロッパを中心に、北アメリカ、南アメリカ (アルゼンチン)、アジア (フィリピン、香港、中国、日本) 等から多数の参加があった。交通機関のストライキ等で日程変更や時間短縮を余儀なくされたにも関わらず、各国の代表者の発表に、フロアを交えた熱心な討論がなされ、盛会であった。

以下、全体の演題傾向、及びいくつかのトピックについて概説したい。

2. 第3回大会の演題内容

4月17日、満場の参加者を前にした開会の挨拶では、SYSTED 学会長、エミリア・ロマーナ地区の代表、WHO (世界保健機構) の代表等が順次演台に立った。

「各国の特性」を踏まえつつも、「全人類の Well-Being」のために、「世界共通の課題として」、障害者及び高齢者の保健福祉サービス

の向上に取り組む必要性が強調されていた点が印象的であった。

引続きセッションに分かれ発表が行われたが、本学会はイタリアでの開催であったため、公用語は、英語、フランス語、イタリア語であった。セッションによっては、演題のタイトル、及び口頭発表ともにフランス語・イタリア語であり、通訳の無い場合はお手上げ状態であった。従って、本報告においては、英語以外の発表部分は割愛させていただくことをお許し願いたい。

本学会のセッションテーマを分類すると、大きく以下の6領域になる。

- 1) 保健福祉政策について
 - ① 保健福祉政策の紹介及び今後の施行計画
 - ② 保健福祉サービスに関する政治的選択の方法論
 - ③ 保健福祉に関する社会政策の発展過程と将来の方向性
 - ④ 各国における社会的・法的問題
- 2) 保健福祉サービスの評価について
 - ① 保健福祉システムの分析方法
 - ② 保健福祉サービスの分析と評価
 - ③ 保健福祉に関するニーズ分析
 - ④ ケアサービスの質的評価方法
 - ⑤ サービス評価の方法論
 - ⑥ リハビリテーション評価の実際
- 3) 障害者に対する保健福祉支援について
 - ① 障害の疫学
 - ② 身体及び精神障害に対する保健福祉支援
 - ③ 職業リハビリテーション
- 4) 高齢者に対する保健福祉支援について
 - ① 痴呆及び脳血管疾患後遺症
 - ② 高齢者の心理的問題
 - ③ 高齢者の転倒問題

- ④ 高齢者の栄養問題
 - ⑤ 高齢者の生活の質の向上
- 5) ケアの形態別支援の方法論について
 - ① 予防とリハビリテーション
 - ② ベーシックケア
 - ③ 在宅ケア
 - ④ デイケア
 - ⑤ 長期滞在型病院におけるケア
 - ⑥ シェルタードハウスのデザイン及びマネージメント
 - ⑦ 在宅看護協会によるケア
 - ⑧ ボランティアの活用とセルフケア
 - 6) その他
 - ① 保健福祉専門職員のトレーニング
 - ② 新開発技術

3. トピック紹介

本学会の発表の中から、3つのトピックスについて、以下にその概要を紹介する。同時に、学会会場で掲示された風刺画も掲載させていただく。

- 1) コンピュータによるケアの代替・補完の可能性

自立生活を営むためのコンピュータ機器は、年々その種類も量も増大する一方である。カードを使用して、家庭内の全てのルーチン的な仕事をコンピュータによって実行することも、今やたやすいことである。しかし、気を付けなければならないのは、コンピュータを用いることによって、何がどの程度向上したのか、明確に評価可能な状態で使用しなければ、返って逆効果を招く危険性をはらむことである。コンピュータの使用効果について、人間を中核に据えた評価法の開発が必要であろう。

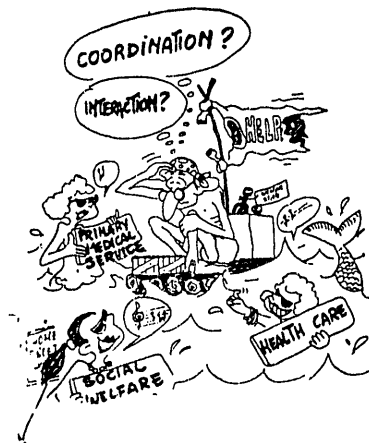
**A HEALS-ON WHEELS SERVICE
COMPUTER ASSISTED
... SOON IN ITALY!**



**RESOURCING QUALITY
OF LIFE!**



**INTERACTIONS WITHIN THE
GERIATRIC SERVICES ...**



2) 高齢者の生活の質の向上

高齢者の生活状況は、小さなストレスで大きく変化するため、高齢者に対する数多くの保健福祉プログラムは、その効果判定が極めて困難である。保健福祉専門職は、プログラムの実施自体が高齢者に効果を押し付ける場合も有り得ることを、充分配慮しなければならない。

3) 保健福祉サービスの真の統合とは何か

保健福祉サービスの統合、及びシステム化を図るためには、まず各々のサービスのクオリティ・チェックから始めなければならない。次いでマンパワー・財政・サービス間の協調をチェックする必要がある。その上で初めて、全体のシステムをマネジメントするキーパーソンの登場を願うことになる。

4. おわりに

第4回大会は、来年、オリンピックの準備が

急ピッチで進むスペインのバルセロナで開催される。

人口の高齢化を駆け足で迎えつつある日本の抱える数々の問題を、世界各国の専門家の視点から再検討する意味でも、保健福祉に関係する多数の方々の参加を得たいものである。

(あんめ・ときえ 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所障害福祉研究部 保健学博士)